
【独りじゃない】

胡蝶愛生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【独りじゃない】

【Nコード】

N5817N

【作者名】

胡蝶愛生

【あらすじ】

本来人間にはあるはずがない尻尾、輝くような金髪。故郷も親も知らない少年は、仲間とともに訪れた地ですべてを知る。残酷な現実を知った少年は、どうするのか。「FINAL FANTASY9」のゲーム本編の一部を小説化。舞台は、DISC3のテラ。

【前編】何も知らない少年は、探していた故郷を知る。（前書き）

「FINAL FANTASY9」のゲーム本編の内容を含みます。

尚、内容に関しては個人の見解を含んでいる場合が御座います。

【前編】何も知らない少年は、探していた故郷を知る。

ジタンⅡトライバル。年齢は十六歳。リンドブルム公国を拠点とする盗賊団タンタラスの一員。

そして今は、クジャの野望を阻止するために仲間たちとともにテラへの道を開き、テラへと遣って来た。

——そう。そこまでは良かった。良かったのだ。

ブラン・バル、と言う名の、テラにある村に辿り着くまでは。

「……」

地下研究所。そう呼ばれる場所に足を踏み入れたジタンは、周囲をぐるりと見回すと眉をしかめた。その先には、自分と同じ髪の色に、本来人間が持っているはずがない尾っぽを持った連中の姿があった。

連中の様子を見ていたジタンは、どうやら自分がこの先平静を装えそうにもないことを感じ取る。次いで、仲間たちには悪いが、彼たちがこの場にいらなくて良かった、と心から思う。もう、これ以上余計な心配を掛けたくはない。

これは、ジタンⅡトライバルと言う個人の問題なのだから。

「そうかいそうかい……まったく……ごていねいなことで……」

連中を視界から完全に消してから口を開くと、意外にも言葉と声色にはまだ余裕があった。そのことに少し安心感を覚えると、ジタンはここへ来るように仕向けた張本人へと向き直った。そして、親指で背後の連中を指差す。

「で……結局これもオレに見せたかったものだってことか？」

小首をかしげながらそう問うと、張本人である少女がゆったりと、それでいて若干機械的な動作で振り返った。色白で傷一つない顔はやはり無表情で、感情の一欠片も感じ取ることが出来ない。

同年代の普通の少女たちと変わらない響きであるはずなのに、身震いするほどの不快感を覚える声が、滑らかでありながら淡淡とした調子で、耳に入ってくる。

「そう……もう理解したようね」

理解。その言葉が、ジタンの胸に突き刺さる。

本当のことを言うのならば、違う、と大声で叫んで否定したかった。ここがガイアのどこかであったのなら、きっと自分はそうしていた。

しかし、違う、と言うことが出来る理由が、なかった。

「ふん……理解したくもないけどな……あいにくそこまでマヌケじゃない……こうも自分と同じようなシッポもった奴がうよういいるんじゃない……」

目の前で人形のように立っている少女にも、自分の背後で研究を続けている連中たちにも、村の中を歩いていた住人たちにも、そして自分にもある、猫のような尻尾、同じ髪の色。

一層のこと、夢だと思ったかった。テラと言うところには来たが、この村の存在だけは夢であって欲しかった。そうすれば、自分はガイアで生きる何かの種族なんだ、と自分をどこまでも誤魔化すことが出来た。

——しかし、現実残酷なほどに、決定的だった。

「彼らは、同じ仲間たち……この地に生きるジェノム……」

「ジェノム？　それがこいつらの？」

少女は、この連中たちをジェノム、魂の器、と言った。猫のような尻尾と、太陽のように輝く金髪を持つ連中たちのことを。

口内がからからに乾く。脳内が、その先の言葉が無意識に拒絶しようとしている。

なぜならば。それは、要するに。

「いいえ、彼らだけではないわ……あなたも、わたしも……わたしたちすべてに与えられた種の名前……それが、ジェノム……」

自分がガイアで生きる生き物ではないと言う、覆しようのない事実になるのだから。

ジタンは、その事実には、眩暈を覚えた。そのまま隅にある荷物の山に手を置き、体を支える。口からは、乾いた笑いが勝手に零れてくる。それが嘲笑なのか苦笑なのかそれとも別のものなのか、最早自分でも区別が出来ない。もう、余裕はなくなっていた。

乾いた笑いと一緒に、乾いた声が乾いた言葉を口にする。

「皮肉な話だ……あれほど探した故郷がまさかこんな所にあるとはな……そりゃ見つかるわけないよな……ガイアの上のどこにも存在しないんだから」

全くもって滑稽な話ではないか。青い光だけを手掛かりに、故郷を探しまわったかつての日々。そこから連想した結果として、海岸を歩きまわった幼き日々。

仲間とともに旅をしているときも、新しい土地や場所へ来るたびに無意識に期待していた。

にも関わらず、ガイア中を回っても、故郷と断言出来るような場所は、なかった。

今、自分で言ったとおりだ。見付からなくても、当然。自分の故郷は、ガイアと言う星にはなかったのだから。

少女は、故郷を知ったジタンの態度に何を思ったのか、こう尋ねてきた。

「うれしくないの？ 自分の産まれた地に帰ったのよ」

その問いと目の前の少女が咄嗟に結び付かず、ジタンは思わず戸惑った。しかし、それも数秒のこと。少女が問うた内容をはっきりと理解すると、目を剥いて声を荒げた。

「うれしい……？ おまえらにそんな感情がわかんのか？ どいつもこいつも魂の抜けたような顔しやがって！」

それが八つ当たりであることはジタンにも充分分かっていた。分かってはいたが、何かを言わずにはいられない。そのような思いが、どこかにあった。

少女はジタンの豹変にも何も思わないのか、表情をぴくりとも動かさずに唯唯言葉を返す。

「仕方がないわ……そのように作られているのだもの……そして、魂をもたないジェノムであることをここでお互い確認し、管理するよう仕向けられている……」

その言葉に、頭の中で何かの糸がぷつんと切れた。

「いったい何のためだ！ もう腹の探り合いはたくさんだ！ テラで産まれたオレがなぜガイアで育ち、暮らしてきたんだ！？ おれは生きてる！ 魂もある！ なのになぜ、こいつらはこんなふうに……」

「あなたが……特別なのよ」
「なに!？」

続くはずだった言葉は、少女によって遮られた。特別、と言う想像もしていなかった単語に、ジタンは思わず声を上げる。しかし、少女はそのまま階段のほうへ向かい、ジタンに一瞥を投げるとそのまま上っていつてしまう。ジタンには、それが付いてこい、と言っているようにも思え、本能的に少女を追う。

「わたしたちは……ただの『器』、あなたは『器』以上の役割を与えられただけ……」

ジタンの行動を気にする様子もない少女は、独り言のように特別の意味を彼に伝えると、彼からは見えない位置で本の一瞬だけ顔を歪め、

「……すべては、ガーランドの意のままに……」

と続けた。それをジタンが聞き逃すはずもなく、「ガーランド!？」
おい、いったいそいつは……」とその背中に問い掛けるが、少女は上へ着くまで何も答えなかった。

地下研究所の上階には、クリスタルのような結晶体が中央に鎮座されていた。そして、それを取り囲むようにして見上げているジェノムたち。先ほど、村を徘徊していたときに声を掛けてみたのだが、外の連中と変わらず、まともな答えは返ってこなかった。

少女はそのような連中に倣うように、不思議なその物体へと頭を上げる。釣られ、ジタンも階段の真横で同じ動作をする。

「ガーランドは、星の管理者……彼の使命は……テラの民の復活」

唐突に聞かされたその内容は、ジタンを驚愕させるには充分だった。がば、と少女のほうへ振り向き目を見張らす。

「テラの民の復活！？　ここにいる奴等がテラの人間じゃないのか？」

もったもなジタンの疑問に、少女はクリスタルのようなものを見上げたままゆっくり首を横に振る。

「彼らは『器』に過ぎない……いいえ、あなたも、わたしも……本当のテラの民は眠っているわ……長い長い時を待って……いずれ時が満ちて、テラがガイアにとって代わる時……そう、この星の光が青から赤に代わる時……」

その意味を、特に後半の部分を飲み込むには、少し時間が必要だった。

ジェノムたちはテラの民ではなく、テラの民の器となる存在。ガイアを青、テラを赤、と例えた少女は、青い光が赤い光に代わったそのときこそが、テラの民の目覚めだ、と言う。青い光が、赤い光に代わ、る。

——ジタンは腕を振り下ろし、叫んだ。

「ちょっと待て！　テラの目的は、ガイアの乗っ取りなのか！？」

静寂を突き破るようなジタンの大声を背中で受け止め、漸く振り

返った少女は然も当然のように返す。「他に何があるっていうの？」と。

「老いたテラは、新しい星を奪うことによってつねに生き続けて来たわ……そしてその時が訪れると、テラの民の魂がジェノムに宿る……それがテラの民の復活……」

「なんでそんな、まどろっこしいことをしやがる！？ お得意の魔法でもって滅ぼしちまえばいいじゃねえか！ アレクサンドリアをそうしたように！」

召喚獣を操り、イーファの樹では艦隊を全滅させ、アレクサンドリアでは城下町を破壊したほどの力。

ジタンの脳裏に、ガーネットの姿が浮かび上がる。このテラの技術により、生まれた故郷と育った王国、産んでくれた母親と育ててくれた義母を完膚無きまでに滅ぼされた、美しい女王。慈悲深い彼女は、この件で自分を責め、その反動で声を失い、復活した今でも小さな精神的外傷となっている。

人間を、国家を輕輕と滅亡することが出来るほどの力を所持していながら、なぜ、待つ。

「はるか昔……一度はガーランドも強引な手段を試みた……けれど失敗した」

「だったらシッポまでどっか行きやがれてんだ！」

「その失敗のため、ガーランドは長い時を待つはめになった……若いガイアが強大な力、召喚獣を使いこなすまでの文明を持たぬよう監視しながら……」

少女から無視されていながらも怒鳴り返していたジタンは、テラの仕打ちを聞き、絶句する。一変して、声が震える。

「だから……召喚士の村を襲い……アレクサンドリアを破壊した……」

大罪、などと言う可愛いものではない。このテラと言う星は、償う気力すらなくなってしまうほどの所業を、今まで幾度となく繰り返してきたのか。自分たちが生きるために。

ブラネの行いも、クジャに踊らされていたとは言え酷いものだ。心のどこかで思っていたが、いやはや、規模が違う。違いすぎる。ブラネの行いが、本当に軽く思えてしまうほどに。

「星には……魂の循環があるわ。魂は星に生まれ、星に還る……その循環までも制御しようとガーランドは考えた……。そのために……あなたにも働いてもらうはずだった」

「何だと!?!」

少女は身を翻すと、ジタンの前を横切る。入り口へと立ち、呆然とするジタンに告げる。

「ガーランドが待ってるわ……ついて来て……」

ジタンが返答する前に、少女は建物から出ていった。

残されたジタンは両手を握り締めると、喉の奥から絞り出したような声で、つぶやく。

「何をたくらんでる! オレにはテラだのガイアだの関係ねえ! オレは……オレは……」

——自分が何者なのかは、自分が決めることだ。誰かに決められてたまるものか。

そう、口に出すことは出来なかった。

【中編】独りぼっちの少年は、生を受けた理由を知る。（前書き）

「FINAL FANTASY9」のゲーム本編の内容を含みます。

尚、内容に関しては個人の見解を含んでいる場合が御座います。

【中編】独りぼっちの少年は、生を受けた理由を知る。

——待ちわびたぞ

「!？」

脳に直接響いてきた声に、ジタンは弾けるように顔を上げた。慌てて周囲を見回すが、誰もいない。しかし、どう考えてもあれは幻聴の類ではなかった。

そう思いながら目の前の階段を見上げたジタンは、そこでその存在に気が付いた。

「お前は……!!」

「今から12年前になる……私はひとりの優秀なジェノムを失った」

ジタンは、驚いた。なぜならば、階段の真ん中から突然老人が、
ば、と丸で手品のように現れたからだ。

前触れもなく出現した老人は、吃驚して立ち尽くしているジタンに一瞥を投げると勝手に話しだした。

「ガイアにつかわし、ガイアの魂の循環を乱すために作られた生命……それがおまえだ……よくぞ戻ってきたものだ」

「うるせえ!! オレが何者かはオレが決める!! おまえなんぞにどうのこうの言われたかねえんだよ!!」

本能的にそう言い返したジタンだが、そこでジタンは、自分にとってすつきりするほどに気持ちの良い結論に辿り着いた。

「そうか……おまえがガーランドだな!!」

「ならばどうする？」

老人、ガーランドの肯定の言葉を聞き、ジタンは思わず殴りたくなる衝動を抑えながら、ガーランドから聞きたいことを問い詰める。

「ぶつつぶす!!……って言いてえところだが、その前に全部話しやがれ!! なぜオレはガイアで育った!? 何のためにおまえたちはガイアを破壊する!？」

そう言った途端、ジタンの目の前からガーランドの姿が消えた。次いで、自分の背後からぞ、とするような気配を感じる。そこから、ガーランドの低い声が聞こえてくる。

「ガイアを破壊するつもりなどない。ただ……ガイアをテラにするのみ……」

「何だと!？」

意味が、分らない。ガイアを破壊することとガイアをテラにすることの違いが。ガイアをテラにすることとは、ガイアを破壊するということと同義ではないのか。

直感的にそう思ったが、ガーランドが話を続けたため、ジタンはその疑問を取り敢えず頭の隅に寄せた。

「無論すべてが思い通りに行くわけではない、おまえがガイアで育ったこともそのひとつだ……おまえと同じように作り出された生命……奴が歯車を狂わせる一因になったのかもしれない」

「奴!？ 誰のことを言ってるんだ!？」

「おまえも良く知っている男だ……」

ジタンは目を丸くした。

自分以外にも、自分と同じある目的で作られたジェノムの男

がいる。しかも、有ろうことか自分とそのジェノムは会ったことがあるのだと言う。

しかし、ガイアで自分と同じ特徴を持った奴と会ったことは、今まで一度もない。それは、確かだ。もし、出会っていたのなら、このようなことにはなっていないはずなのだから。

「ついて来い……ガイアの輝きが真紅のテラの輝きに変わるまで、まだ時は満たぬ……いずれおまえの力が必要になるやもしれん」

身を翻したガーランドから、今何か重要なことを言われたような気がするが、そのころにはガーランドはまた姿を消し、もう階段を登り切っていた。

見失わないために、ジタンは急いでガーランドの後を追いつける。

階段を上がった先には、蝸牛の殻のような形をした奇妙な物体が積み重なるように置かれていた。

そしてガーランドは、重力を完全に無視したような、俗に言う空中歩行をしていた。

「待ちやがれ!!」

ジタンはそう叫びながら、ガーランドが立ち止まった場所まで物体から物体を飛び越えていく。

やっこの思いでガーランドの前に着地すると、ジタンは下からガーランドをにらみ付ける。

「さあ話してもらおうか、いったい……」

「私はテラの民の魂が目覚めた時の器として、ジェノムを作ってきた……しかし、今から24年前……おまえと同じようなひとりのジェノムが生を受けた。そのジェノムは器にするにはあまりに意志が強く、一度は私も廃棄を考えた……」

ここでガーランドは一旦言葉を切ると、ジタンに背を向けた。

「しかしこうも思った……力があるのなら、それを利用すれば良い。私はそのジェノムをしもべとしてガイアに使わし、ガイアの魂の循環を乱すことにした……」

「だからそいつは誰かと聞いてるんじゃないか!!」

再び歩き出したガーランドの背中に向かって、ジタンはさつさと答えると言わんばかりに怒鳴った。そしてまたジタンも、ガーランドを追う。

「まだわからんか……? おまえにとっても良く似た男だ……」

「オレに似てる? そんな奴に会ったことは……」

然も呆れたようなガーランドの言葉に、ジタンは本気で首を傾げる。

だからこそ、次の言葉には開いた口がふさがらなかった。

「己が瞳に映る姿のみをとらえればな……おまえとよく似た魂の形をした男……わたしがガイアにつかわした男、おまえの兄とも言うべき男……それがクジャだ」

「クジャ!? 奴がジェノム!?」

さらりと口にされたその事実、衝撃を受ける。現実から目を背

けようと咄嗟に記憶を思い返す。

良く思い出せ。思い出せ。確か、クジャには。

「そんなバカな……奴にはシッポもないし見た目も……」

そう。クジャはこのジェノムたちと同じ外見をしていなかった。何より、尻尾も生えていなかった。

ジタンがそう言いたいことを察したのか、ガーランドは彼の背後へと移動しその疑問の答えを返す。

「隠しているだけだ……奴は自分がジェノムであることを否定しようとする。自らの存在意義を認めず、己が生を主張しようとする……うりふたつではないか？　そう、おまえに……」

瓜二つ。その言葉にジタンは目の色を変え激昂した。

ふざけるな！　オレはあんな奴とは違う！！」

しかし、ガーランドは意にも介さない。そして、ジタンをより奥へと誘^{いざな}っていく。

「奴もよく言った……『こいつらとは違う』。同じ種であるジェノムたちをさしてな……」

先ほどと似たような場所へと出てきた。ガーランドは、空中歩行をせずジタンに合わせるかのように歩く。とジタンが思った矢先、

ガーランドの姿が前から横へ移った。

「ジェノムとしては不適合とも言える奴の欲望はあるひとつの任務に関しては最適だった……戦乱をガイアにもたらず、それが私が奴に与えた任務だ。本来あるべき流れではなく、不自然に乱れた流れを作り出すこと……」

「だからいったいなぜ!？」

「魂の流れを乱すということ。それがつまり、戦乱……想像以上に奴は働いたと言うべきかもしれぬ」

それは、一個人と言うよりは一つの駒へと向けられた言葉のように聞こえた。

内容がほど良く切れたことを感じたジタンは、今度は自分自身のことを尋ねるためにガーランドへと近寄る。

「オレは!？ オレはいったいなぜガイアに……」

「おまえがブラン・バルに生を受けた時、クジャにはおまえの存在が許せなかった……自分より大きな力を秘めたジェノム……このままでは己の地位をおびやかすかもしれぬ……クジャは、おまえを捨てたのだ……奴がこれから戦乱を起こすべき地、ガイアに……」

自分の立場。今ここで、ジタンは自分が誕生した理由を思い知った。

「おまえは、オレをクジャと同じようにガイアに戦乱を起こさせるためのしもべとして!？」

ガーランドがうなずくと、ジタンは自分の目の前が一瞬真っ暗になった。

詰まり、もし自分がクジャに捨てられていなければ、クジャの仕

事の一部を自分がしていた、と言うことになる。

——マダイン・サリも、アレクサンドリアも、一步間違えれば。

「その通りだ……クジャがおまえを捨てたのは想定外だったが、それもまた奴の特性として認めることにした……それに奴にとつてみれば、ガイアの戦乱はおまえへの勝利の証明につながるわけだ……奴がおまえを殺さず、生かしたのも己が存在を証明したいという欲望のためかもしれぬ」

「そんなことのために多くの人の血が流されたって言うのか!？」

勝利だのなんだのはこの際どうだっていい。唯、クジャの欲望による結果とガーランドの計略に、怒りを覚えた。

「そんなこと、とはクジャの欲望か？ 我々の目的、魂の循環を乱すと言うことか？」

ガーランドが、また消える。しかし、近くにいることは分かっていたので、ジタンはそのまま言葉を吐き出した。

「……どちらもだ……だいたい、その魂の循環を乱したところでいい……」

ガーランドは、何も答えない。どうやら、自分が追い付くまで答えないつもりなのだろう。

ジタンは床を蹴り、ガーランドの背後へと着く。と同時に、ガーランドが口を開いた。

「魂を選び分けるのだ。魂の循環の中でガイアの魂をよどませ次第にテラの魂を流してゆく。本来あるべき速度より魂の流れを加速すること、それが戦乱の意味だ。そして時が満ちた時、ガイアの魂は

無く……ガイアは完全にテラとなるのだ」

「そんなこと、どうやって!？」

「おまえたちも目になっているはずだ、イーファの樹、そしてそこから発生する“霧”……ソウル・ディヴァイダー、それがイーファの樹の役目……そして“霧”はよどんだガイアの魂だ……」

脳内で早く、内容を整理する。

ガーランドの目的は、魂の循環を乱しそれに乗じてガイアの魂の中にテラの魂を少しずつ入れていく、と言うこと。そして霧は、その魂の循環から追い出されたガイアの、魂。そう言うことなのだろうか。

しかし、霧は、イーファの樹は、活動を止めた。それは要するに、ガーランドの計画を阻止したこと他ならない。だから、「“霧”はオレたちが止めた! おまえの思い通りには行かない!!」と叫ぶのだが、ガーランドには一切通用しない。それどころか。

「おまえたちの見たものはイーファの樹の裏側に過ぎない……今なおイーファの樹は活動し、ガイアの魂の流れをせきとめようとしている……見るがいい……今のこの星の姿を……」

——イーファの樹はまだ活動している。そして、その事実をジタンがその目で見るのは、まだ少し先の話だった。

「……は……?」

そうつぶやきながら見上げれば、一面が青い光の中で一部分だけ

が赤く光っている。ジタンのその独り言を拾ったガーランドが、中央に置かれた螺旋階段の最上階で答える。

「ここは、言うなれば観測所……ガイアの……そしてテラの輝きを観るための場所……」

「どういうことだ？ あの光はいったい……」

「あれが、この星の中心だ……魂の循環の始まりであり終わりでもある。今はまだガイアの輝きと呼ぶべきものだ……しかしあの輝きが青から真紅に変わる時、すべての魂はテラのものとなり、テラの復活は完了する。そのために、私はあの光をイーファの樹でつつみ、星の内部からガイアの魂を選び分け循環をさまたげた……それがイーファの魂の真の目的、真の姿だ……おまえが地表で見たのは裏の姿に過ぎん。ガイアの魂、“霧”を廃棄することを止めたとして、この星の魂の流れは変わらぬ」

「結局……クジャはイーファの樹に魂を送り込む死神だったってところか……」

「そう、私の作りだした死神……ただし、それはおまえが成長するまでの間だけ……」

ガーランドが言わんとすることに何か引っ掛かりを覚え、ジタンは勢い良くガーランドのほうへ顔を向けた。「どういうことだ!？」と、叫ぶように問う。

ガイアの輝きを見上げるまま、ガーランドが答える。些事に過ぎんと言わんばかりの口振りで。

「奴の魂に永遠は必要ないのだ……次におまえを作り出すことが決まっていたのでな」

「オレが成長してクジャを超えたらクジャの魂は用済みだと……」

継いだジタンの言葉に、ガーランドは首を縦に振った。それが示

すのは、否定ではなく肯定。

「そうだ……もうすぐ奴にはその時が訪れる……」

「……」

クジャは、もうすぐ死ぬのか。

動かないままでいるガーランドを確認し、ジタンは階段があるところへと飛び降りる。ガーランドに気付かれぬよう、得意の忍び足で歩く。階段に着くまでのわずかな道中で、思う。

あのクジャのことだ、自分自身の魂の期限については恐らく知っているはずだ。ならば、クジャの性格からして自らの死をそう素直に受け入れるのは難しい。

もし、自らが死に直面したとき、クジャは一体どうするのだろうか。クジャは、ただでは死なない。きっと。

「どうだ……そろそろ己が存在の意味がわかったのではないか?!?」

しかし、どうやらガーランドのほうが先のようなだ。

振り返ったその先に先ほどまでいたジタンがいないことに驚いたのか、ガーランドが息を呑む音が聞こえた。

ジタンは最強の短刀オリハルコンを握り、慌てて降りてきたガーランドの前をひらりと立ちふさぐ。ガーランドを正面から見据え、地を這うような低い声でうなる。

「わかってたまるかよ……オレはガイアで育ち、ガイアの人間と共に笑い、泣き、時を過ごして来た……」

「そのような小さな時より、悠久の時を星と共に生きれば良い……おまえにはその力があり、世界があり、理由がある……」

ふざけるな。

瞳に莫大な怒りを宿したジタンはそのまま腕を振り、オリハルコンをガーランドに突き付ける。

「力も何も関係ない……もしオレに帰る世界があるのなら……タンタラスの仲間たち……ビビ……フライヤ……サラマンダー……クイナ……スタイナー……エーコ……そして、ダガー。それだけじゃない多くの人々……あいつらと生きた世界だ!!　もし理由と言うのなら、オレの大切な人々に悲しみをもたらしたおまえらを……テラをぶつつぶすのはこのオレだ!　オレがテラにジェノムとして生を受けた理由はそれで十分だ!!」

息継ぎせずに大声を張り上げたため、肩で息をする。

そうするジタンの目の前で、ガーランドがすつと目を細めた。次の瞬間、絶大な威圧感がジタンを襲った。大量の冷や汗が、水のようになら下へと流れていく。

ガーランドの中で、何かが変わった。そう、直感した。しかし、ここで威圧感に負けて縮こまるわけにはいかない。腰を低くし、ガーランドへうなる。

「残念だな……おまえのその魂の形こそ、新たなる死神にふさわしいと思ったが……」

「ああ、なつてやろうじゃねえか!　おまえらの死神にな!!」

「その力、その肉体だけしか利用できないと言うことか……」

「うるせえ!　もうゴタクは聞きあきた!　覚悟しやがれ、ここがおまえの墓場だ!!」

「愚かな……」

ジタンとの会話をそう締め括ったガーランドは、彼を高圧的に見下ろす。駆け上がりとしたジタンはそのままガーランドの目を見

そして。

——その身よ、新たなる魂を迎える器となれ……

その場で頭を抱え、うずくまった。

最初のときのように、頭に直接聞こえてくる声。しかし、最初とは格段に違う。

頭が、割れるように痛い。何が起きたのか、さっぱり分からない。しかも、意識が朦朧としてくる。

持っていたオリハルコンが、乾いた音を立て床に落ちる。

「な、なにを……」

絞り出すような声は、終わりまで告げることが出来なかった。そのまま、人形のように階段に倒れ込む。もう、体は少しも動かなかった。

「ただのジェノムにするのには惜しい素材であつたが……仕方あるまい」

余りの激痛に意識を手放す直前、ガーランドの言葉が耳に入ってきた、気がした。

【後編】仲間を避ける少年は、自分の存在意義を知る。（前書き）

「FINAL FANTASY9」のゲーム本編の内容を含みます。

尚、内容に関しては個人の見解を含んでいる場合が御座います。

【後編】仲間を避ける少年は、自分の存在意義を知る。

オレハ……ダレダ？

ナニモワカラナイ……ナニモカンガエラレナイ……

——ジタン！！

アア……ソウヨバレタコトモアツタカ……

イロンナヒトガソウヨンダ……

——ジタンはすぐカツコつけちゃうんだから！

アア、ソウカモシレナイ

——いつもふざけおって！！

ソウダ、ソノトオリダ

——それがお主らしいと言うことじゃ

オレラシイ……？

——ジタンと一緒に旅をしてて、ボク、強くなれたと思うんだ……

ヤメテクレ！ オレハツヨクナンカ……

——おいしいモノ以外に大切なモノ教えてもらったアルよ

チガウ！！ オレハナニモシラナイ！！

——それが仲間だということか？

ナカマ……ナカマ……？

——ジタン！！！！

ワカラナイ……オレハ……ダレダ？

——ジタンがいたから……

モウ……ツカレタ……

——どうしてジタンは……？

オレハ……モウカラッポノ、ウツワ……ダカラ……

「ジタン！！！」

だ、れダ……？

「起きてよ、ジタン！！！」

誰……？

「しっかりしなさいよ、ジタン！！！」

——

「う……」

「あ、ジタン！！」

うめき声を上げながら、ゆったりと瞼を上げる。先ほどまで真っ黒だった視界に、徐徐に光が差し込まれていく。そして、自分がいる場所や状況よりも、今にも泣き出しそうな不安一杯の表情でこちらを見上げている少年少女の存在を、最初に認知する。

「ビビ……エーコ……？」

ぼうっとした頭を回転させ、舌足らずに声を掛けると、子どもたちの表情が安堵から見る見る明るくなる。子どもらしい、素直な反応。満面の笑顔を浮かべ、子どもたちは口口に言う。

「よかった、気がついたのね！　まるで死んじゃったように眠ってるから……」

「そうか……オレは……」

「心配したんだよ？　ひとりで行っちゃうなんて……」

いつもの自分なら、ここでおちゃらけた様子で冗談の一つや二つでも言い、子どもたちを安心させるだろう。しかし、今はそのような余裕はなかった。

子どもたちの言葉を聞き流しながら重たい体に鞭を打ち、椅子のようなものから立ち上がる。ふらふらした自分の体をそのままに、ジタンは瞳を揺らす子どもたちに冷たい声で言い放った。「……何しに……来たんだ？」と。

「え？」

途端、子どもたちの目が見開き、顔が凍り付いた。明らかな動揺。当然だろう。まだまだ幼い子どもたちに向かって、ジタンが突き放すような声を出したことは今まで一度もなかったのだから。

「そ、それはもちろんジタンを……」

「たいへんだったんだからね！　ジタンがひとりで行っちゃって……」

ジタンの豹変に衝撃を受けたまま、子どもたちは震えた声でジタンの問いに答える。普段の優しいジタンを知っているからこそ、子どもたちはジタンが態度を豹変した理由が分からないのだろう。

困惑している子どもたちを押し退け、ジタンは自分の体を引きずるように歩きだす。ふらつく自分を止めようとした子どもたちが、感じたことがない殺気立った自分の空気に脅え、立ちすくむ。

それでも子どもたちはめげずに手を伸ばしてくるが、ジタンは触れるどころか一瞥もせず素通りする。そして、心底鬱陶しいと言わんばかりの口振りで吐き捨てる。

「余計なことをするな……」

「え……？」

「これはおまえたちには関係ない問題だ……」

「そんな！？」

「またそうやってカッコつける！！　ジタンだけの問題なワケないでしょ！？」

「ねえ……ジタン無理しないでいっしょに……」

「うるさい……ガキは……黙ってろ……」

威勢の良い声と大人しい声をその一言で黙らせる。しかし、次の瞬間には「ジタン！？」、「ジタン……」と子どもたちは自分の名前を叫ぶ。その声を背中で受け止めるも、それに応じたりはしない。

子どもたちをその場に残したまま、ジタンは出ていく。

咄嗟に追い掛けようとした子どもたちの前で無情にも鉄格子は閉まり、ジタンはその鉄格子に少しの間だけ寄り掛かる。

「……」

「ジタンってば!!」

「ムチャだよ、ジタン!!」

飽きることなく掛けられる声にジタンは舌を打ち、いつの間にか手元に戻っていたオリハルコンを手取る。

「ゴチャゴチャうるせえ……ガキどもだな……」

耳をつんざく咆哮。物すごい勢いで近付く気配。

「ガキにはわからねえ……オトナの世界ってもんがあんだよ……」

そう吐き捨てながらオリハルコンを構えるのと同時に、青い胴体と黄色の鶏冠とさかのようなものを持つ鳥のような魔物——アムドウシアスが目の前に降臨した。

ジタンは、その姿を視認すると表情を崩す。相性が悪い。飛行する魔物は、地べたを歩くしかない自分たちには最悪の相手だ。普段そのような魔物を相手にするときには、ビビの黒魔法かフライヤのジャンプ攻撃に任せるのだが今回はそれが難しい。自分から突き放した以上、黒魔法には期待出来ないし、フライヤも行方が分からない。

と、わずか数秒ながらそう思考を巡らしていたジタンは、魔物の動作に一瞬遅れて反応した。ふらついた体では避けることすら間に合わず、ジタンは歯を食いしばり来るだろう衝撃を待ち受ける。

——直後、背後から慣れ親しんだ気配を感じた。次いで、頭上か

ら声が降ってくる。堅苦しい口調に合わない、凜とした鈴のような声と、低音の心底呆れたような声が。

「苦戦しているようじゃな」

「世話のやける奴だぜ、まったく」

啞然とするジタンの両隣からホーリーランスと数枚のライジングサンが駆け抜け、アムドゥシアスへと突き刺さる。

致命傷を刺されたアムドゥシアスは、人一倍大きい咆哮を上げると、地鳴りのような音を立て地面へと平伏した。

ジタンは、目を見開いたまま背後へと振り返る。

「ひとりで行くなどと……無謀にも程があるのではないか？」

「……」

ブルメシアが誇る女竜騎士は柔らかい口調でジタンに声を掛けるが顔は一切笑っておらず、

「人にはおせっかいやいといててめえは自分だけで全て解決か？」

燃えるような赤毛を持つ男は心底腹が立っていると見受けられる態度でジタンに問い掛けた。

嗚呼、なぜ。ジタンは心の中でつぶやく。なぜ。

考えるよりも早く体が動き、伸ばしてきたフライヤの手を乱暴に払いのけたジタンは素早く身を翻す。

「助けてもらわなくてもあれぐらいの敵、ひとりでなんとかなるさ

……」

「待たぬか、ジタン!!」

「……」

背中に浴びせられるフライヤの激昂とサラマンダーのあからさまなため息には、聞こえなかった振りを貫いた。

――

扉を潜り階段を下りた先で、聞き覚えがありすぎる声と、穏便ではない物音が聞こえてきた。

「!？」

「どわ~~~~!!」

「アイヤ――!!」

はるか向こうの地点から自分の足元にまで吹っ飛ばされてきた二人に目を見張る。それは、吹っ飛ばされたと言う事実からなのか、それとも他のことが理由なのかは、ジタン本人でも計り知れなかった。

ただ、いるかいなか判断しづらい位置から見事なまでに飛ばされてきた二人が無傷であるわけもなく、しかし、本当に怪我をしているのだろうかと首を傾げるほどにぴょんと軽い動作で起き上がる。

「これしきのことではられはせぬのである!!」

「おいしく料理してあげるアルよ!!」

そもそも、食べ物のことしか脳がないクイナはともかく、スタイナーが単身で苦戦するような魔物とは一体、なんなのだろうかと何気なく顔を上げた先で、自分たちよりも数倍は大きい――そう、分類するのならば虫と表現すべきだろう四枚羽の緑の魔物がこちらの出方を窺っていた。

「スタイナー……クイナ……おまえたちまで……」

ぽつりと零した言葉は、魔物——アバドンへ突進していく二人の耳には恐らく届かなかった。

「とおりや〜！！」

「オアチャ——！！」

螳螂のように鋭い腕が風を操り、その鋭い風圧は離れた場所に立つジタンの頬を切る。赤い線が浮き上がり、血が舞う。オリハルコンを握る手に、ぎゅっと力が込む。

ジタンでさえ傷を負うのだから、渦中にいる二人は尚更。体躯が良い二人でさえも迂闊に近付くことが出来ず、風圧の中心でうずくまる二人の姿が見える。

アバドンの腕が、不意に動きを変える。不自然なその動作が、魔法の詠唱だと気が付くにはそれほど時間はかからなかった。そして、そのことに思い至った瞬間、ジタンは無意識に地を蹴っていた。

「おまえら……」

風の力が及ばないところを判断し、潜り抜けていく。二人の横を通り過ぎるとき、今の状況を感じさせないいつもの声が「おそいぞ！ ジタン！」と張り上げるのを耳にしたが、ジタンはそれにもまた聞こえない振りをする。

今は極力、仲間の声は聞きたくなかった。

隙だらけのアバドンの横へ回り、両手で思い切りオリハルコンを突き立てる。風が止み、詠唱が途切れる。

スタイナーは、その瞬間を見逃さなかった。オリハルコンを刺したまま飛び退くジタンを横目に、すさまじい剣圧がアバドンの体を

襲う。剣士であるスタイナーだけが使うことが出来る剣技、シヨック。ベアトリクスとの戦いで散散味わわせられたその威力は、使用者がスタイナーでも変わることはない。

アバドンは直撃を受け甲高く叫ぶと、ぴたりと動かなくなった。しばらく様子を探り、尚且つ何度か蹴り上げ、本当に死んでいることを確認してからジタンは突き刺さったままのオリハルコンを引き抜く。

いつの間にか近寄っていた二人が、黙るジタンに話しかける。

「ふん!! あれしきの相手、軽いものだ!」

「ジタン、ワタシたち置いていったらダメアルよ」

黙るところか一瞥すらしないジタンの態度を気にすることなく、二人は続ける。

「ジタンにはまだまだおいしいものところに連れてってもらうつもりアルよ!」

「まだ姫さまにふさわしい男かどうか、見極めが終わったわけではないのだぞ!!」

姫さま。スタイナーが発したその言葉に歩き出そうとした足が止まり、わずかに体が強張った。

艶やかな黒髪を風に遊ばせ、清澄な黒い目で自分を見詰める彼女の柔らかな表情が、脳裏に浮かぶ。

誰よりも愛しい娘。しかし、ジタンはその残像を振り払う。

「もう、放っておいてくれ……おまえたちにこれ以上迷惑はかけられない」

「……」

投げやりでありながら、しかしそれ以上にジタンの本音が含まれた台詞に、二人は口を閉ざし顔を合わせることにしか出来なかった。その間に、ジタンは二人から立ち去る。

「みんなそろいもそろって、おせっかいなバカ野郎ばかりだ……」

自然に閉じた扉に背中を預け、自嘲する。

嗚呼、どこからか魔物の咆哮が聞こえる。徐徐に大きくなるそれは、魔物の標的が自分なのだと察するに十分な効力を持つ。

今までで一番深い嘲笑を浮かべ、ジタンは一步を踏み出す。

「けど……わかってるんだ……オレが一番、大バカ野郎だってことぐらい……」

途端、自分の体が空中を舞った。揺らぐだけだった視界が、スローモーションとなる。

思わず見下ろせば、先ほどまで自分が立っていた位置を、シエルタドラゴンが陣取っていた。あれの突進が直撃したのかとジタンが悟ったのは、スローモーションが終わり下降が始まったときだった。必死に受け身の体勢を取っても、高いところから落下したときの衝撃は半端ない。しかも、水の中に飛び込むならまだしも、固い地面へ落ちたときの激痛は、比ではない。

地面と激突した背中が、悲鳴を上げる。内蔵が圧迫され、息が苦しい。

しかし、シエルタドラゴンの攻撃は、これだけではなかった。自分の体よりも軽く倍はある掌が、上からジタンを押しつぶした

のだ。叫ぶこともままならない圧力が、全身に襲いかかる。

手がどかされても、ジタンにはもう一度体を起こす労力は残されてはいなかった。呼吸をすることだけが精一杯で、体力の限界はもう底を突こうとしている。

だから、シエルタドラゴンが再び手を持ち上げるのも、どこかゆったりとして見えた。

——ひっそりと覚悟を決めたそのとき。ジタンの体を、突如慣れ親しんだ魔力が包み込んだ。

それは、いつもいつも、前線で怪我を負うたびに感じる癒しの波動。慈悲に満ちた彼女が唱える、最上級の治癒魔法。

——まさか。

間一髪でシエルタドラゴンの掌を交わし、ジタンは声を張り上げた。

「ダガー!!!」

視界の隅で、黒が揺れた。

肩まで短くした艶美な黒髪を振り乱し、どこまでも透き通った大きな黒い瞳に怒りを宿し、しかし、深い悲しみを帯びた表情で、彼女は静かに口を開いた。

「これが……あなたの出した答えなの？」

凜とした声で問い掛けたその背後で、彼女に付き従える召喚獣が次々とシエルタドラゴンへ突っ込んでいった。

シヴァのダイヤモンドダスト、イフリートの地獄の火炎、ラムウの裁きの雷、リヴァイアサンの大海嘯、さらにはバハムートのメガフレアがシエルタドラゴンを襲う。

主に後衛を務める彼女にしては珍しい召喚獣の大群と猛攻撃に、ジタンは言葉を失う。そして、魔力の残量すら考えないその無茶な

攻撃が、彼女が本気なのだと言うことを暗に教えてくれる。

無論、強力な召喚獣の攻撃を真正面から受け無事でいられるわけもなく、バハムートのメガフレアが命中すると、シエルタドラゴン
は派手な音を立てながら体勢を崩していった。

「ダガー……」

召喚獣が姿を消し、二人しかない空間に、ジタンの小さな声は
かなり響いた。

こちらへと振り返った彼女の表情は先ほどと変わらず悲しげな
もので、しかし、すべてを見透かしているようで、ジタンは咄嗟に口
をつぐむ。

「そうやって自分だけで解決しようとするのね……」

はっと顔が凍り付くのが自分でも分かる。彼女を直視したくなく
ジタンは体を逸らし、乾ききった唇を震わせる。

「わかってくれ……みんなを巻き込みたくないんだ……」

「わたしたち仲間じゃないの!？」

「そう思ってる! そう思ってるからみんなを……」

容赦なく彼女の言葉が背中にくっついてくる。ミコトやガーラン
ドから聞いた話を思い返し、唇をかむ。

「オレはガイアの人間じゃない……ひとつ間違えばオレがアレクサ
ンドリアを破壊していたかもしれないんだぞ……そんなオレがの
うとみんなといっしょにいられるか!？」

アレクサンドリアと言う単語に、もしくは今自分が言い放った内

容に、ダガーの顔色が変わる。鯨の髭を持つ手を震わせ、そつと顔を伏せる。

「……ジタンはいつも、わたしたちを見ていてくれたわ……」

え、と思わず振り返ってしまったジタンは、次の瞬間後悔する。

「でもジタンはわかっていない……わたしたちもジタンのことを見ていたってこと！ ジタンがわたしたちを見ていたようにわたしたちもジタンのことを見ていた！！ ジタンがわたしたちを信じてくれたようにわたしたちもジタンのことを信じていた！！」

なぜならば、彼女は今にも泣き出してしまいそうな弱弱しい表情をその美しいかんばせに浮かべていたからだ。

それは、残酷な不幸が重なっていたところに彼女がさらけ出していたようなはかなげな弱弱しさではない。彼女と言う存在にきっちりとした線が引かれ、鮮やかに色彩を放つ気高さの中に存在する濃厚な憂い顔。

いつの間に、彼女はこのような表情を浮かぶことが出来るようになったのだろうか。初めて見る彼女の表情に、ジタンは圧倒される。しかし、それ以上に彼女が続けた声が、言葉が、ジタンの胸の奥を焦がした。

「ジタンがわたしたちを守ってくれたように……守ってあげたいの……ジタンを……」

——心が、震えた。激情が、体の中をのたうち回る。自分と言う存在のすべてが浄化され、許されていくような気がした。

いつもそうだ。ジタンは思い返す。彼女にとっては些細な一言が、

いつも自分を救う。彼女は、知っているのだろうか。彼女と言う存在そのものが、ジタンと言う存在の救いになっていることを。

嗚呼、彼女が存在する限り、自分は自分のままでいても構わないのだろうか。皆の、彼女の傍にいても構わないのだろうか。

目頭が熱くなる。

「ダガー……」

「その通りアルよ」

独特な語尾を持つ舌足らずの声が聞こえ、クイナがスタイナーを引き連れ現れた。二人とも、先ほどの戦いで傷だらけだ。直視することを避けていたとは言え、二人の怪我の深さにジタンは驚き、申し訳なく思う。ジタンの顔が曇ったことに気付いたのだろうか、ダガーがすかさず治癒魔法を唱える。

「昔お師匠様に言われたアル……『おいしいものをもらったら、おいしいものをかえす、それが礼儀アルよ』ジタンにはまだ、おいしいカエルごちそうしてないアル！」

「クイナ……」

治癒魔法を浴び、ほっこりと笑うクイナらしい言い分に、頬が引きつりながらも自然な笑いが漏れる。やってきたことがやってきたことなので、ジタンに出来ることは大人しく話を聞いていることだけなのだが、せめてやはり蛙は勘弁してもらいたいと頭の隅で訴えた。

なんだかんだでいつもの自分の思考に戻りかけていることを密かに自覚するジタン。すると、スタイナーが前へ進み出、鋭利な眼差しでジタンを見下ろしてきた。

「貴様を黙って見送ろうものなら、騎士の名が泣く……それこそ末

代までの恥！ 観念するのだな！ 地獄の底までついて行くぞ！」
「スタイナー……」

強面のおっさんと地獄まで行くのも、それはそれで嫌だと眉間にしわを寄せると、ダガーからは軽やかな笑い声が、クイナからは忍び笑いが聞こえてきた。言った本人のスタイナーも、豪快に笑う。ジタンは鼻をさすり、口を開く。

「へ……まったく、おせっかい野郎ばかりだぜ……」

「お互いさまなのである……」

「それじゃ、行きましょう！！ ……と思ったのだけど……あれ？
他の4人は？」

きよろきよろと四人で周囲を見回すが、フライヤ、サラマンダー、ビビにエーコの姿が見当たらない。ジタンはきよとんと首を傾げる。

「……もしかして、閉じ込められちゃったりとか？」

「そうかもしれないアルな……」

のほほんとしたジタンの言葉に、スタイナーとダガーが即座にかみ付く。

「貴様が皆を置いてくるからだ！」

「そうよ！ まったく……」

そのまま怒鳴り始めてしまいそうなスタイナーと、そのまま説教を始めてしまいそうなダガー。久久に見る二人の剣幕に思わずひるみながらもジタンは懸命に二人を抑え、ぼりぼりと後頭部をかく。

「あらら……わりいわりい……とりあえず、もどるとしようか……」

三人の視線を受け、ジタンは笑顔で言い放つ。この地へ来てから、初めて見せるいつもの満面な笑顔で。

「みんなだな!!」

【後編】仲間を避ける少年は、自分の存在意義を知る。（後書き）

ここまでお読み頂き、有り難う御座います。

ゲームの台詞のみを引用した小説化は初めての試みで、四苦八苦する点が幾つもありました。気付けば、台詞ばかりを追いかけて、人物たちの内面に入り込めていないところも何か所か。背景も表現しづらいものが幾つもあり、表し方にも悩みました。なので、後日、勝手に加筆修正している可能性があります。先に言っておきます。

さて。ゲームの中、常に言葉や行動で仲間を救ってきたジタンが、この場で初めて仲間に救われます。ゲームでこの場面を見たときはBGM「独りじゃない」の迫力も重なり、新鮮に思いましたし、同時にジタンの人間臭さを感じました。題名は、このときのBGMからお借りしております。良い曲です。

深くは語りません。どうも頭の中で整理が出来ていないので。ただ、これが小さなきっかけになれば良いと思っております。

では、これにて失礼させて頂きます。

最後に。作品内の台詞はすべて、ゲーム内から引用しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5817n/>

【独りじゃない】

2011年10月5日21時49分発行